



赤水さん

地図に広がる
いきいき人生

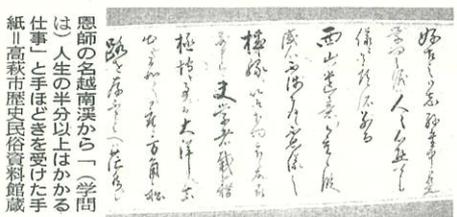
④よき師よき友

江戸時代のベストセラーとなる日本地図「改正日本輿地路程全図」（赤水図）を世に送り出すほどの大仕事をやる人はやはり、よき師、よき友に恵まれるんですね。長久保赤水さん（1717～1801）を見るにつくづく思います。

20代の赤水さんはまだ、地図作りが目覚める前です。農作業の傍ら、常陸国赤浜村（現高萩市赤浜）から下手綱村（現同市下手綱）の医師鈴木玄淳の私塾に通い、仲間と詩文、漢文などに励みます。

一方、さらに知識を深めるために水戸藩の儒者名越南溪に封書を送ると、返事

が返ってきた。返事には学問をこころざす者の心構えが説いてありました。四書五経、漢書、後漢書など中国の史書の熟読をすすめ、「結局、学問は心がけ次第。（修めるに人生の半分以上はかかる仕事です）」と諭し、最後に「書では言い尽くせませんので、お会いしてお話ししましょう」と結ぶのです（長久保赤水顕彰会発行）



紙 高萩市歴史民俗資料館蔵

大学者から返事が来ちゃった



鈴木家の墓を管理する渡辺文昭さんと律子さん。大きい墓が玄淳、小さい墓は玄淳の妻、阿清（おきよ）＝高萩市下手綱

が来ちゃったんですね。赤水さんは小躍りして喜んだに違いない。何しろ南溪は当代きっての大学者。若い頃は林家の私塾（昌平坂学問所の前身）で塾頭、後に彰考館の総裁を務めることになる人なんですから。

返書には学問をこころざす者の心構えが説いてありました。四書五経、漢書、後漢書など中国の史書の熟読をすすめ、「結局、学問は心がけ次第。（修めるに人生の半分以上はかかる仕事です）」と諭し、最後に「書では言い尽くせませんので、お会いしてお話ししましょう」と結ぶのです（長久保赤水顕彰会発行）

玄淳のお墓は、高萩市下手綱の「いわん坂」途中の高台にあります。管理しているのは渡辺文昭さん（76）と律子さん（67）のご夫婦。春と秋の彼岸と夏のお盆には墓を洗い、草を抜き、花と線香を手向けています。

「嫁に来た時には誰のお墓か分からなくてね」と律子さん。文昭さんも「おやじが大切に墓守をしてたんだけど、亡くなる前に、渡辺家との関係を詳しく聞きそびれてしまったんだ」と少々、照れた様子です。

「玄淳先生の私塾は渡辺さんちの敷地内にあつたと思われるんです。渡辺さんの先祖は、能筆で知られたまな弟子ですよ」赤水さんは数え25歳で、まだいとお順を妻にめとります。25歳で長男、27歳で次男が生まれ、学問も家庭生活もますます充実した時期なのです。赤水さんはいよいよ、地図作りに踏み出します。（フリーライター・岡村真）

原田木曜の掲載です